

こんな活かし方も!



和歌山県立星林高校
進路指導部
西川 充伸 先生の場合

適性診断を交えた進路学習が
情報との向き合い方を深める

星林高校で情報の授業を担当する西川先生は、生徒にとって現実感のある「生データ」をいかに活用するかにこだわっている。その点、進路を模索することは、まさに生徒が現実的に解決すべき切実な課題。そこで、1年生の6月から、7時間使った進路学習を情報の授業として実施している。

「最初に2時間かけて適性診断を活用した自己診断をします。情報と向き合うには、いかに客観的なデータを得られるかが大切です。その点、適性診断などは重要な客観的なデータとなります」(西川先生)

自分への理解と客観的に出した結果にギャップはないか。将来への漠然とした希望は、果たして適性と合致しているのか。そもそもどのようなことが向いているのか。自分で考えているだけでは思いもよらないような結果が出てくることは少なくない。

「単に、合っている・合っていないではなく、客観的に出てきた情報をいかに考えるかが大事です。そこで、まずは感想を、そして具体的にどこが合っていて、何が違っているかを、ノートにひたすら書いていく。その蓄積が、後々の進路決定のための貴重な資料となります」

さらに、職業をネットや本などで調べたり、身近な人にその職業への見解をインタビューしたり。多面的に情報を蓄積していくことで、徐々に「情報」の向き合い方を体験していく。適性検査は、そのスタート地点として役立つのだと言う。

「結果として、自分が就きたいと考えている職業が、自分の適性とギャップがあると出れば、そのギャップをどう埋めていけばいいのか考えればよい。適性診断によって決めつけるのではなく、広げて可能性を探っていく。そういう「考える」力を大切にしたいと思っています」

●西川先生の授業展開 <全7時間>

・自己診断 <2時間>

適性診断を受けてその結果をもとにレポート作成(1時間)。さらに異なる適性診断を受けてレポート作成(1時間)。2種類の結果を比較し、考えを深める。

・仕事調べ <1時間>

ネットで、自分が興味を持った仕事について調べる。

・レポート作成 <4時間>

最終的に、調べた職業・仕事をテーマに2000字のレポートを提出。まずは1時間でレポートの書き方を指導し、3時間かけてじっくりレポート作成に取り組み。ネット情報のコピーは禁止。必ず自分がやるべきことをToDoリストにしていこうと重視する。

※授業時間外に、関連図書を借りて調べたり身近な人へのインタビューなども課題として行う。

無駄にしない 適性診断・適職診断を進路学習に役立てる

無駄にしない

適性診断や適職診断を行っても、「当たった」「なんか違う」で終わりになっていませんか? 診断を進路学習に活かすにはどうしたらいいか、整理してみました。取材文/清水由佳ライター・キャリアカウンセラー

「受けただけ」ではもったいない その後の活用次第で視野が広がる

進路学習をする際、「少しでも興味のある仕事を調べる」と言っても、なかなか興味をもてないと立ち止まる生徒が少なくない。そんなとき、「何でもいから」といって言葉で促しても逆効果。しぶしぶ調べた職業のことは、結局自分ごととして捉えられずに終わってしまうがもったいない。

そんなとき、最初の一步として役立つのが、適性診断や適職診断などの診断テスト。ところが、「受けた方がいいが、何か違う」とか「結果として出てきた職業が、自分の苦手な科目(例えば理科科目など)が必要で全然無理」など、否定的に捉えられ、あまりうまく活用できないという声も聞く。

結果をもとに「考える」仕掛けを いかにつくるかが大事

そこで、適性診断や適職診断を有効に活かすためのいくつかのポイントを挙げてみたい。

●診断の意味を伝えて、
自己理解に結び付ける

コラムにもある「ジヨハリの窓」を解

その原因の二つに、適性診断や適職診断の「こういう性格」「こんな職業が向いている」という結果だけに注目しているせいもあるのではないだろうか。

進路学習の初期段階で、適性診断をずっと活用しているという和歌山県立星林高校・進路指導部の西川充伸先生も、「適性診断を占いのように、当たっている・当たっていないで終わらせてしまうのはもったいない」と語る。適性・適職診断は、その結果によって職業や性格を決め込むのではなく、自分の可能性に気付いたり、知らなかった領域を知るきっかけにしていくもの。方向性を絞るのではなく、可能性を広げるためのツールなのだ。

「開放の窓」を広げるためには、他者から言われた自分では意外と思うようなことを受け入れてみる(「盲点の窓」を開いていく)ことや、自己開示していく(「秘密の部屋」を開いていく)ことが大事。そのための素材として適性診断が活かせるというような解説をすると、わかりやすい。さらに、診断結果をもとに、それぞれの窓に気付いたことを書き入れて整理していくと、自己理解を深めやすいようだ。

●なぜその結果が出たかを考え、
新しい気づきにつなげる

また、なぜそのような結果が出ているのかを考えていくことも大事。

例えば、職業に関して、自分の能力や得意・不得意とは別に、なぜその職業が向いていると出ているのか理由を考えてみると、視野の広がりにつながりやすい。もともと職業診断などは、その仕事で働く人たちが同じ診断を受けた際に傾向として出る特

徴と重ね合わせて、「似た考え方や行動特性をもっている」ことから導き出されているのが一般的。どんな特徴がポイントになっているのかを考えると、「SEE」で一人でも多くとプロگرامを作る人かと思っただけで、チームで協力しながら新しいことに挑戦していく仕事だから、自分の適職として出てきたんだなどの職業への気づきにつながることもある。特定の職業名だけでなく、「社会に貢献する」「緻密に計画する」「新しいことに積極的に挑戦する」など、自分が目指したい方向性のキーワードに気付くことで、職業調べの視野が広がることもある。

また、回答していた過程で印象に残った質問に注目し、なぜ印象に残っているのか、質問で思い出した出来事はどんなことなのか、それらを書き出してみると、自己理解への助けにもなる。

「適性診断という情報を、そのまま鵜呑みにするのはではなく、そこから考えることを促します。その考える力が、これから大きく変化する社会の中で、とても重要な力になると思います」(西川先生)

そんな力を養うためにも、適性診断や適職診断を有効に活用したい。

自己理解や職業発見に活かす

<ジヨハリの窓>

	自分は知っている	自分は知らない
他人は知っている	「開放の窓」 自分も他人も知っている自己	「盲点の窓」 自分は気付いていないが他人は知っている自己
他人は気付いていない	「秘密の窓」 自分は知っているが他人は気付いていない自己	「未知の窓」 誰からもまだ知られていない自己

適性診断や適職診断の結果を見ながら、自分でも「そうそう」と思うことは「開放の窓」へ。「そうかな?」と思ったことは「盲点の窓」へ。「本当は○○なんだけど…」と思ったことは「秘密の窓」へ。それぞれ記入していくと、自分をさらに知るための素材となる。

さらに、「盲点の窓」に書いたことをまず受け入れてみて、「どんなときにそのような行動をとっているか?」を考えてみたり、「秘密の窓」に書いたことは、どのようにしていきと他者に理解してもらえそうか考えてみたりすることで、「開かれた窓」が大きくなっていく。

<職業を広げるためのワークシート>

適性が高い仕事TOP5	適性が低い仕事TOP5
共通する特徴は?	向いていることとの違いは?
自分との共通点はどこか?	
他にも向いていそうな職業は?	

高校生の主体的な進路選択を応援する先生のための進路指導・キャリア教育専門誌

Career Guidance

キャリアガイダンス



【最新号】Vol.419 2017年10月発行

■特集 「働き方改革」で、どこへ向かう?

【Interview】「子どものため」は多忙化の原因でもあり、改善の要因でもある。妹尾昌俊(教育研究家)

【Report】「多忙」とどう向き合うか 八千代松陰高校(千葉・私立)、沼津城北高校(静岡・県立)、近畿大学附属高校(大阪・私立)ほか

【Message】「チームとしての学校」が描くこれからの教育現場

【Special Talk】管理職の「本気」と「覚悟」が学校を変える 荒井優(私立・札幌新陽高校 校長)、日野田直彦(大阪府立箕面高校 校長) 平川理恵(横浜市立中川西中学校 校長)

■連載

●進路指導実践を磨く! 石狩南高校(北海道・道立)

●進路指導ケーススタディ 夏休み明け、休みがちな生徒への呼び出し面談

「キャリアガイダンス」誌は全国の高校に贈呈しています(校長、教頭、副校長、進路指導主事先生宛に郵送) バックナンバーの記事はすべてWEBサイトで閲覧いただけます

http://souken.shingakunet.com/career_g/

キャリアガイダンス

検索